

BOOK Review

新・栄養塾



評者 矢吹 浩子 明和病院看護部長

臨床栄養管理の重要性は、いまや医師や看護師だけでなく多くの医療職種に認知され、栄養サポートチームのみならず、現場の看護師も栄養管理の知識を深めています。看護師の場合、栄養管理の知識を習得するには基礎教育では限界があり、働き出してから研修会や書籍などによって習得しなければなりません。しかし、書籍もさまざまなため選び方は難しいでしょう。そこで「これは頭に入りやすい」というのが本書ではないかと思います。

本書は10年前に出版された『栄養塾—症例で学ぶクリニカルパル』を進化させた内容ですが、編集に一層の工夫がなされました。冒頭から生化学を中心とした「栄養管理に必要な基礎知識」の章が約100ページに大幅に増ページされていたこととその内容の細かさに、一瞬「これは難しいかも」という印象がありましたが、読んでみると説明記述の直後に関連する解説があり、「なるほど」となってしまいます。もちろん生化学の項には臨床現場ではなじみの少ない単語がたくさん登場するので、看護師が生化学を理解し習得するには、ここからさらに「自分で調べる、学ぶ」という一歩を踏み出す必要があります。ですが各項、箇条書きにまとめてあるので、その一つひとつを順にみていけばよいでしょう。わかりにくい単語が少なからず出てくるとはありますが、それを自身で調べて理解していくことで確実に知識として身につけていきます。

説明記述に関連事項の解説を加えているのは「臨床栄養 実践編」、「臨床栄養 病態編」「栄養管理のスキルアップ」といった章も同様で、これが本書の特徴だと思います。例えばPPNの合併症に静脈炎を教えるのはどのテキストでも同じですが、実はそのメカニズムを説明できる看護師は多くはないでしょう。またメカニズムまで解説している書籍も多くはありません。しかし本書では、静脈炎とpH、浸透圧の関係や、ビタミンと細菌性静脈炎の関係などが説明記述直後に併記されています(pp.132-3)。また、褥瘡症例への総エネルギー投与量に関しても、「傷害係数をいくらに」とか、「たんぱく投与量を体重あたりどれくらい」というような説明だけではなく、そのエビデンスとなる研究結果なども併記して解説されています(pp.209-10)。ふに落ちるように理解しやすい内容になっているし、ガイドラインのように客観的な根拠を知ることができます。

一つひとつの説明に根拠や関連データなどを加えながら教えていく授業のような本書の構成は、「塾」というタイトルに実によく合っており、表紙のエンブレムも「塾」にふさわしくカッコいい。ペガサスと王冠を使ったエンブレムは著者の大村健二先生、濱田康弘先生の本書に対する自信とこだわりでしょうか。このエンブレムにまったく遜色がない本書は、今私が最もお勧めしたい栄養管理の教本です。

大村 健二、濱田 康弘 著

B5/288頁/2020年/定価3,740円(本体3,400円+税10%) / ISBN978-4-260-04135-5 / 医学書院刊